

編集後記

編集長(ダン シロウ)

世の中に様々な編集の不正が漂っている。

医大の入試において、最終的合否判定を一部の人間の価値観の反映で、女性を排除していた。試験は公正だと思わせ、競わせたあげくの事だった。

許認可事業での手続き不正や、記録の改ざんもあったが、これもカテゴリーとしては編集作業である。

編集の行われぬ雑誌(社会)はあり得ない。世界の出来事をすべて報道するニュース番組があり得ないように、常に編集作業はあらゆる場所で目的に合わせて行われている。だから姿勢が問われる。

ジャーナリストが求められる姿勢、国家公務員が求められる姿勢、権力者が問われる姿勢。そこでグズグズと不正を容認してしまうと、社会構成員みんなの気持ちをくじく。

頑張っても仕方がない。みんなやっているんだから、少しくらい良いだろう。どうせ悪いことして儲けたに決まっているから、盗んでもかまわない。

そんな行動基準の次世代を育ててはならない。それは私たちの世界と未来社会への破壊行為だ。人類はこれまでも、何度も同じ悪事(たとえば戦争)を繰り返してきた。だからどうせまたやるのだと結論するか、愚かしく繰り返してはならないと何度でも語るかは、私達が選ぶことが出来る。

*

家族療法学会誌の編集をしているKさんと話していて、250人ほどの学会員で、マガジン連載者が50数人なんて考えられないと言われた。そんな発想をしたことがなかったことに気づいた。確かに、会員の執筆比率は驚異的なものかもしれない。小さな学会だが、この辺を自慢材料にできるかな。

又、ページナンバーの入力ミスを発見。左基五郎の忘れ傘だと思っておいてください。

編集員(チバ アキオ)

聴いた話によると、地球上の生命の始まりはウイルスのような非常に微細なものの集合体であつたらしい。その生命を繁栄させて、維持しようと思うと様々な環境に適応しないといけない。その時に初めて、集合体から「個」に分かれる必要が出てきたと。それが「個」の始まりだという。集合体であれば、じわじわ広がり存在し続ければよかった。集合体内での新陳

代謝はあれど、集合体としては継続維持された。「個」に分かれると、様々な環境に適応するので、繁栄し、広がった。でも、「個」となった為に、「生死」というものが伴うことになった。それが「生死」の始まりである。これらの起源が示すものは、「個」であることが万能ではないことを示している。個人主義というのは万能ではない。生命は全体を意識して、社会とは切っても切らずに歩んできた。それが今、「今だけ、金だけ、自分だけ」の「3 だけ主義」に代表される、利益誘導型の社会(政治)が蔓延し、お金や「個」でしか考えていない怖さを感じていると聞いた。「我々はどうしたらいいですか？」とその方にきくと、「医師会のように介護、福祉業界が結束しないとイケない」と。

実際はどうだろう、国から介護、福祉職に処遇改善費が出ていたりしても、福祉職にお金が回ってくるのは、職場を通じてである。その方が都合がいい人がいるから、このやり方が継続しているのだろう。直接福祉職にわたすことが始まると、結末が助長される恐れがあり、怖いのであろう。基地問題、原発問題等の常套手段である。

「個」は「元集合体」であるという話を聞くと、ユングの集合無意識周辺の話も合点がいく。また、システム論で考えることも納得である。地震、豪雨、続く台風など、自然災害は集合体としての意識を問い直しているようにも思われる。持つものと持たざる者。自分だけはいい思いをしたい。今だけ、金だけ、自分だけの蔓延。それも個々のレベルで打破しなくてはならない。

無料で読める、著者の意志で社会に意味があるから書き続ける、他者にも自分の経験を役立てて欲しい…「3 だけ主義」から解放されているマガジンというメゾレベルの集合体。ミクロ、メゾ、マクロへの作用も実感しながらの 34 号である。

編集員(オオタニ タカシ)

「ダークツーリズム」という言葉がにわかに注目を集めている。レジャーとしての観光が楽しみを求めるものであるのに対し、ダークツーリズムは人の死や悲しみに関わる地を訪れるもので、目的や意義は通常の観光とは大きく異なる。前号の短信に書いたが、今年の5月に東日本大震災の被災地を巡った。ニュースや報道で知っているつもりでも、やはりその場に行かないとわからないことがある。帰宅困難区域や住居制限区域、避難指示解除準備区域に至るまでの道のりの中で見かけた廃屋のひとつひとつに、そこに住む人々や家族の営みがあったこと、それが有無を言わせぬ強制的な力によって断絶されたことが、その場を訪れたことでまざまざと感じられた。事象と

しては、「大震災」、「原発事故」とくることができるが、それが個人や家族に及ぼした影響や被害は、個別的である。そのことに想像を巡らせざるを得ないものが、何気ない風景の中に無数に存在していた。

今号の編集作業中にも、台風21号の被害があり、北海道の震災が起こった。台風に関しては、自身の勤務先も2日間の停電に遭い、電気の無い中での業務を余儀なくされたが、報道では見えないところで大小さまざまなことが起きている。マガジンの連載の

テーマもその多くが、ニュースで大きく報じられる事件のようなものではない、小さな、しかし確実に今そこにある人々の営みを取り上げたものである。すぐ身近にも、自分の想像が及ばないものがあると知っておくこと。それが、自分の常識だけに縛られない思考と想像力を与えてくれるように思っている。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4-3-8
ランプラス二条御幸町4-0-2 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻34号

第9巻 第二号
2018年09月15日発行
<http://humanservices.jp/>

**第35号は2018年12月15日
発刊の予定です。**

原稿締切2018年11月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと・・・というのもあります。)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画を

お知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない分野、様々な立場の方達の対人援助領域からの積極的発信を期待します。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

今回の表紙は、2018年東日本家族応援プロジェクト用に制作したカラーパネル「沖に向かって泳ぐ」からの一コマ。

人生において人は、つつい安全な沿岸を遊泳してしまう。しかしいつか時が来たら、何が待ち受けているかは分からなくとも、沖に向かって泳ぎ始めなければならない。

私にとってこの感覚は五十歳で公務員を辞めて独立し、仕事場D・A・Nをスタートしたことだった。その結果として、立命館の大学院で働くことになり、それと東日本大震災がクロスして、10年プロジェクトが始まった。

小冊子「木陰の物語」制作も含め、様々なことが1998年に沖に向かって泳ぎだしたことがきっかけになった。

「何が待っているか分からない」は決して否定的な言葉ではない。そもそも人生に何が待ち受けているかは分からないのだから、そこに重ねて言う「沖に向かって」は決意を後押しする言葉なのだ。(2018/9/7)